

## まえがき

本書は、『日米同盟史』と銘打った初の書籍である。こういうとやや意外に思われるかもしれない。日米同盟は日本外交の基軸とされているため、その歴史に焦点を合わせた『日米同盟史』という名の書籍も多そうなものだ。

そうであるにもかかわらず、『日米同盟史』というタイトルを掲げた書籍がなかったのはなぜだろうか。

いくつかの理由が考えられよう。そもそも日米同盟が成立してからの年月が短く、歴史と呼ぶには新しすぎたことがある。事実、1853年のペリー（Matthew Perry）来航からの歴史に関しては、『日米関係史』というタイトルの優れた書籍がすでに複数存在する。

くわえて、戦後の日本にイデオロギー対立が存在したことも見逃せない。日米同盟という表現が日本で一般的に使われるようになったのは、1980年代頃である。同盟といえば戦前の日独伊三国同盟を想起させることもあり、その言葉への忌避感が日本社会には存在したからである。

だが、1951年の旧日米安全保障条約の締結から数えて、すでに70年以上の歳月を経た。さらに、イデオロギー対立の背景となった冷戦が終結してからも30余年が経過し、イデオロギー論争もかつてに比べれば相対化されている。

したがって、今や日米同盟の歴史を冷静に振り返る土壌は整っていると思われる。戦後日本が依拠してきた「自由で開かれた国際秩序」の危機が叫ばれ、日米の役割も転換しつつある今日こそ、日米同盟の来し方行く末を正面から考えてしかるべきではあるまいか。

こうした問題意識を抱いていた編者に、法律文化社の八木達也氏が書籍出版をもちかけてくださったのが本書の始まりである。そこで、日米同盟に関心をもちつつも専門とする時代やテーマが異なる各執筆者に声をかけ、2023年6月から6回にわたり研究会を開催した。方向性や内容について自由闊達な議論を重ね、おのおのの原稿を何度も読み合わせてきた。

自戒を込めていうと、近年の研究は多くの資料を用いて政策過程をより詳細に描けるようになったが、それゆえに対象となる期間が短くなりがちである。

したがって、各執筆者が集まり長いスパンの通史を論じられたことは、日米同盟の変化が浮き彫りになる、知的な刺激に満ちた経験だった。

その一方で、日米同盟の歴史を通じて変わらないものも出てきた。それが、本書を貫く「対称性」と「対等性」をめぐる問題である。詳しくは序章に譲るが、この対称性と対等性はややもすれば混同される。あるいは、対称でないから対等でないと短絡的に捉えられることも多い。これらを区別して論じた本書によって、読者の日米同盟史への理解が少しでも深まれば、執筆者一同にとって望外の喜びである。

最後に、全研究会に参加し、本書の企画から編集・校正に至るまで懇切丁寧に担当してくださった、八木氏に厚く御礼を申し上げる。

2025年9月8日

旧日米安全保障条約署名の日に

山口 航